OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エウェンキ語形態音韻論および名詞形態論
Author(s)	朝, 克
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58784
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	朝　　克
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	乙第　3　号
学位授与年月日	平成１６年７月１５日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当　論文博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	エウェンキ語形態音韻論および名詞形態論
論文審査委員	主　査　教　授　橋　本　　勝
	副　査　教　授　田野村　忠　温
	副　査　助教授　岸　田　文　隆
	副　査　助教授　塩　谷　茂　樹
	副　査　京都大学教授　庄垣内　正　弘

論文の内容要旨

エウェンキ語(鄂温克語)はエウェンキ人(鄂温克人)が使用している言語である。エウェンキ語はアルタイ諸語の満洲・ツングース語族に属し、ツングース語族の代表的な言語である。エウェンキ人は中国の黒龍江省、内蒙古自治区に住み、人口は合わせて 3.2 万である(1991 年人口統計)。その内、エウェンキ語の話者は約 2 万人である。

エウェンキ語は文字がない言語である。満洲・ツングース語族の多くが危機に瀕した言語である現段階では、エウェンキ語は元来の形態音韻変化と文法形態変化の現象を完璧に保存する数少ない言語である。そしてエウェンキ語の形態音韻変化や文法形態変化の現象の研究は、非常に重要な研究課題になっている。エウェンキ語は、満洲・ツングース諸語と北極圏に属するシベリヤの諸語、北海道の網走で話されているウイルタ語、及びモンゴルとトルコ諸語、または朝鮮語、日本語との間に様々な面で深い関係を有する。故に、エウェンキ語の研究は、アルタイ諸語及び北極圏に属する諸語の研究者達に注目されてきた。エウェンキ語の研究はアルタイ諸語の歴史的・通時的研究に対して、重要な役割を果たすと同時に、北極圏の諸語、日本語、朝鮮語の研究に対しても重要的な意味を持つ。

筆者はエウェンキ人で、大学に入るまでエウェンキ語を母語として使い、エウェンキ語の社会であるエウェンキ族自治旗で生活した。大学を卒業して科学院に入り、言語学の理論を勉強しながらエウェンキ語の研究を始めた。この 22 年間で、日本語、英語、漢語、モンゴル語でエウェンキ語の専門書を 8 冊出版し、論文を 82 篇公刊した。

本論は、筆者が 1983 年から 2003 年までの 20 年間にわたり、エウェンキ語の最も大きな方言である輝河（ホイ)方言について、現地調査した 520 万語のデータから、形態音韻変化と名詞類語彙の文法形態変化を観察し、理論構築の手がかりとしている。同時に、欧米と日本の形態論の研究成果と理論を広範囲に参考にしたうえで、エウェンキ語の資料と緊密に結びつけて完成したものである。

本論は序説、第Ⅰ部・形態音韻論、第Ⅱ部・名詞形態論、結語、付属資料からなる。

序説では、(1)本論の考え方・観点・目的及び重要性を述べ、(2)本論で論じる問題点を概括し、(3)問題点を解決する方法を指摘し、(4)本論の研究価値を客観的、体系的に説明し、

(5)本論の基本的構成と理論的枠組について述べる。

第Ⅰ部の形態音韻論は、派生語尾における母音の形態音韻変化体系の分析(**第１章**)、活用語尾における母音の形態音韻変化体系の分析(**第２章**)、派生語尾及び活用語尾における子音の形態音韻変化体系の分析(**第３章**)、語幹における母音や子音の形態音韻変化体系の分析(**第４章**)からなる。

エウェンキ語で新語を派生し、文法概念を表す際に、特定の音韻構造形式を持つ語尾を用いる。そして、これら語尾体系においては、約三分の二が規則的な形態音韻変化の特徴と性質を示している。さらに、これら形態音韻論上特定の意味を担う語尾には固有の音韻条件や環境があり、特定の音素間の組合せの基本原理を厳守し、特定の語幹の後に現れる。

形態音韻変化を持つ語尾には、ある文法概念あるいは新語の派生意味を示すために、幾つかの関連する語尾、または一連の語尾を組み合わせたものがある。例えば、比較級の文法概念を表すために、3類型18項目72の形態音韻変化を持つ語尾を必要とする。派生語尾の音韻構造にも七種類の形態音韻変化を起こす実例がある。エウェンキ語において語尾の形態音韻変化は極めて豊富で、新語の構成、語と語の結合、文の構造の構築について、重要な役割を果たすなど、非常に多用されている。なお、語幹範疇にも形態音韻変化が存在する。本論では、これらの形態音韻変化が重要で典型的な現象であることに言及し、形態音韻論の手段と方法を充分に利用して全体的に観察･分析し、形態音韻変化の現象を各々に認定、分類、各々の項目、類型を設けて検討する必要がある旨を強調する。

形態音韻論の**第１章**では、派生語尾の形態音韻変化を持つ母音について、(1)その音韻変化類型を**二類型、三類型、四類型、五類型、六類型、八類型と六つに整理し、母音の形態音韻変化の分類体系を構築し**、(2)他の音素と組み合わさる法則を**五つの類型・13項目とに分類して詳論し**、(3)音韻構造形式を**九つの類型に整理･分類**し順序付けて分析した。(4)最後に**六つの角度から理論的に概括した。**

第２章では、活用語尾における形態音韻変化を持つ母音について、(1) その音韻変化類型を**二類型、四類型、五類型、六類型と四つの類型に整理し、母音の形態音韻変化の分類体系を構築し**、(2)他の音素と組み合わさる法則を**八つの類型･23項目に分類して詳論し**、(3)音韻構造形式を**十三の類型に分類し検討した。**(4)最後に**五つの面に整理して論じた。**

第３章では、語尾の形態音韻変化を持つ子音について、(1) その音韻変化類型を**二類型、三類型、五類型と整理**しまとめ、子音の形態音韻変化の分類体系を構築し、(2)他の音素と組み合わさる法則を**八つの類型・９項目に分類**して音素間の組合せの体系を論述し、(3)音韻構造形式を**九つの類型に分類し順序付けた。**(4) 最後に**８項目にわけて総論した。**

第４章では、語幹の形態音韻変化について、(1)**代名詞語幹**、(2)**名詞語幹**、(3)**助詞語幹**における**形態音韻変化の現象と特徴を検討した。**(4) 最後に**六つの角度から語幹の形態音韻変化の現象を総合的に論じた。**

以上の論述を経て、エウェンキ語の形態音韻変化を論証し、形態音韻変化の体系化を試みて、形態音韻変化の理論的枠組を構築した。

第Ⅱ部の名詞形態論では、**複数形態、格形態、人称形態、級形態の文法体系、各形態要素の音韻構造の特徴及び文法形態論上で果たす機能や役割などを論述した。**

名詞類語彙の文法形態の諸問題を解決する根本的な方針として、(1)あらかじめ名詞類語彙の文法形態の類型と体系を考える。(2)名詞類語彙の文法形態を表す語尾体系を語幹の意味、及び文の用法上の意味構造と緊密に結び付けて考える。(3)特定の言語環境や意味条件

でどの文法語尾が使用されているかを整理し、個別的な議論と体系的な議論を結合させる。

文法形態論上で抽象化した語尾は、特定の音韻構造形式を持ち、特定の文法意味を担っているが、同様の文法形態範疇に属する語尾は相互の関連があり、文の意味構造とも切り離すことができない。従って、名詞類語彙の文法形態変化を研究する場合、文法形態論の方法や手段を合理的かつ適切に利用し、文の構造に関わる意味まで考えて行わなければならない。そして文法語尾は、形態論上の機能や役割をそれぞれに認定・峻別し、各々の項目や類型に分類・配列し、文中で具体的に使用されたデータから典型的な実例を挙げて議論する必要がある。同時に、特殊例を提示し、共通性、等質性、類似性など典型的な実例と非典型的な実例を一律に分析し研究する原則を主張する。

名詞形態論の**第５章**では、複数形態の語尾体系を(1)**一般活用型**、(2)**親族活用型**、(3)**名称活用型**、(4)**特殊活用型と四つの種類８項目に分類**し、音韻構造形式や、用法論上の特徴、及び文法形態論上で果たす複数概念を論述した。(5)最後に**七つの面から複数形態に関する分析を整理し、総論とした。**

第六章では、格形態の語尾体系を総合的に分析し、(1)**主格**、(2)**属格**、(3)**定対格**、(4)**不定対格**、(5)**与格**、(6)**定処格**、(7)**不定処格**、(8)**奪格**、(9)**造格**、(10)**共同格**、(11)**方面格**、(12)**方向格**、(13)**比較格**、(14)**限定格**、(15)**有格**、(16)**所有格**と**十六種類に分類して検討し**、それら語尾の音韻構造と意味構造を詳論した。また用法論上の特徴を(1)**名詞用形**、(2)**代名詞用形**、(3)**形容詞用形**、(4)**数詞用形**、(5)**連続用形**、(6)**多用形**、(7)**修飾用形**、(8)**複数用形と区分して検討した。**さらに、各々の格形態が持つ特殊性や関連性及び普遍性を論じ、使用類型の体系を確定し、格形態の語尾が文法形態論上果たす機能や役割の基本原理を統合的に考察し分析すると同時に、それが文のレベルで特定の働きをしていることを論述した。最後に、格形態について**八つの面から総論し、格形態の体系化を試みた。**

第七章では、まず人称形態の語尾を所属人称及び再帰人称の２通りに分けて検討し、次に単数形態及び複数形態に分類した。さらに所属人称の語尾を一人称、二人称、三人称に細分した。最後に一人称複数形態の語尾を包括形及び除外形に分類した。同時に、(1)所属人称及び(2)再帰人称の語尾由来と歴史的変化原理を論証した。また、人称形態語尾の基本性質、及び文法形態論上で現れた使用価値、具体的に果たす機能を詳細に論述した。(3)人称形態と格形態の結合原理、連続形式で使用される法則を論証し、**それらを結合し体系化を試みた。**また、それらの結合条件と文法形態論上で示した連続的な文法概念の特殊価値と機能を分析した。(4)本章で検討したことを**十項目にまとめ総論とした。**

第八章では、級形態を原級、比較級、最高級の三つに分けて検討した。そして(1)原級は特定の語尾体系を使わずに、語幹形式で現れる基本原理を指摘し、原級体系には元来形と派生形の類型があることを明示し、さらに**６項目に細分して記述した。**(2)比較級の語尾を**三つの類型・十八の項目に細分して分析した。**他方で、それら三つの類型に分類された七十二の語尾の理論的枠組を構成するために、数多くの語尾の特定の言語環境、及び語幹との間に厳しく設定された結合法則、または文同士の組合せのレベルまで考えなければならないことを論証した。(3)最高級の語尾を**一般用形及び特殊用形に分類して検討した。**(4)結論として前述した内容を**八つの面からまとめて論述した。**

以上の論述を経て、エウェンキ語の名詞類語彙に関する複数形態体系化、格形態体系化、人称形態体系化、級形態体系化を考え、名詞形態論の体系を構築しようと試みた。

結語では、**本論で議論した諸問題点について、概括的に述べ、形態音韻論と名詞形態論**

の形態変化体系を総括し、理論的枠組を確立できるように工夫した。なお、具体的な例はエウェンキ語の形態音韻論や名詞形態論の範疇によっているが、特定の語尾変化と語幹の実例を統合的に考え、全般にわたって分析した。また、形態論の手段と方法を充分に利用し、それぞれの項目・類型・分野を設定し、関連する形態変化の現象を個別に認定・分類・配列した理由を概括して論証し、形態音韻論と名詞形態論の体系を明確に議論した。そして形態変化の普遍的な原理を客観的体系的に分析し、それらの類似点、共通性、等質関係を典型的に示す実例を議論すると共に、典型的な現象から抽出された事例のみでは、客観的な事実の分析を放棄してしまう危険性があることを繰り返し強調した。

本論では、分析の方針として形態音韻論と名詞形態論に関連するデータを集めた。そして一般的に音韻論から導かれることから以外の実例も集めた。さらに、それら形態変化の要素の特殊性、典型性、共存関係を基本的な論拠として、諸形態体系を構築した法則を説明した。また、エウェンキ語の形態音韻論及び名詞形態論とそれぞれに関連する要素間の特定のレベルから、文のレベルまでの関わりを観察・分析した原理を論証し、形態論研究において形態要素の連続性を重視すべきだと指摘した。最後に、形態論にもとづく研究方法が、エウェンキ語の音韻変化及び名詞形態変化の現象に関する研究の中で最も有効な手段となると結論付けた。

付属資料では、エウェンキ語の音韻体系を全体的に記述した。

論文審査の結果の要旨

朝克（チョク）氏の博士論文「エウェンキ語形態音韻論および名詞形態論」は、氏が1983年から2003年までの20年間にわたり、エウェンキ語の最大方言であるホイ(輝河)方言について現地調査した520万文字のデータに基づき、エウェンキ語の形態音韻論と名詞類語彙の文法形態論を論じた477ページに及ぶ大部な力作である。

エウェンキ語は、無文字言語であり、アルタイ系満洲・ツングース諸語に属し、中国領内の東北地域に約2万人の言語人口を有し、ロシアでは、ソロン語と呼ばれる言語である。

氏は、エウェンキ語を母語とし、これまでエウェンキ語をはじめ、満洲・ツングース諸語に関する8冊の専門書、80篇以上の学術論文を公刊しており、とりわけ中国では、将来最も活躍が期待される満洲・ツングース諸語の専門家の一人である。

氏の本博士論文を含む一連の研究の最も特筆すべき点は、先に述べた通り、自身が長年にわたるフィールドワークにより調査収集した膨大なデータに基づき、それらを逐一綿密に分析し、極めて実証的に持論を展開していくと言う堅実な研究手法にあると言える。

本博士論文は、序説、第Ⅰ部・形態音韻論、第Ⅱ部・名詞形態論、結語、付属資料から構成される。

序説では、本論の考え方、目的、重要性を述べ、問題点を概括するとともに、それらの問題点の解決方法を指摘し、本論の研究価値を客観的、体系的に説明し、最後に本論の基本的構成と理論的枠組について述べる。

第Ⅰ部・形態音韻論は、第1章で、派生語尾における母音の形態音韻変化体系の分析を行い、その音韻変化類型を六つの類型に整理し、分類体系を構築し、他の音素と組み

合わさる法則を五つの類型、13 項目に分類し、さらに音韻構造形式を九つの類型に整理分類し分析し、最後に六つの面から理論的に総括した。第 2 章で、活用語尾における母音の形態音韻変化体系の分析を行い、その音韻変化類型を四つの類型に整理し、分類体系を構築し、他の音素と組み合わさる法則を八つの類型、23 項目に分類し、さらに音韻構造形式を十三の類型に分類し、最後に五つの面から論じた。第 3 章で、派生語尾及び活用語尾における子音の形態音韻変化体系の分析を行い、その音韻変化類型を三つの類型に整理し、分類体系を構築し、他の音素と組み合わさる法則を八つの類型、9 項目に分類し、さらに音韻構造形式を九つの類型に分類し、最後に 8 項目に分けて総論した。第 4 章で、語幹における母音や子音の形態音韻変化体系の分析を行い、代名詞語幹、名詞語幹、助詞語幹における形態音韻変化の現象と特徴を検討し、最後に六つの面から論じた。以上の論述によって、エウェンキ語の形態音韻変化を体系化し、その理論的枠組を構築することに成功している。とりわけ、従来、用いられてきた「異形態」(「母音調和」も含む) という用語ではなく、新たに「可変母音音素」、「可変子音音素」という用語を導入し、形態音韻変化を一貫して論じている点が注目される。

第Ⅱ部・名詞形態論は、第 5 章で、複数形態の語尾体系を 8 項目に分類し、その音韻構造形式や用法論上の特徴等を論述し、最後に七つの面から分析し検討した。第 6 章で、格形態の語尾体系を総合的に分析し、１６種類に分類し、その音韻構造、意味構造、さらには用法論上の特徴を論述し、最後に八つの面から検討し、その体系化を試みた。第 7 章で、人称形態の語尾体系を詳細に分析し、10 項目にまとめ総論とした。第 8 章で、級形態に言及し、原級、比較級、最高級の三つに分けて各々詳細に分析し、最後に八つの面からまとめ論述した。以上の論述によって、エウェンキ語の名詞類語彙に関する複数形態、格形態、人称形態、級形態の体系化を考え、名詞形態論の体系化の構築に成功している。

結語では、本論で議論した諸問題について概括的に述べ、形態音韻論と名詞形態論の形態変化体系を総括し、理論的枠組の確立を目指した。論証の結果、エウェンキ語の形態音韻論及び名詞形態論の研究において形態要素の連続性を重視すべきだと強調し、最後に形態論に基づく研究方法が、エウェンキ語の音韻変化及び名詞形態変化の現象に関する研究の中で最も有効な手段であると結論付けた。

付属資料では、エウェンキ語の音韻体系を全面的に記述し、本論文を終えている。

審査委員の中から、本論文の第Ⅰ部・形態音韻論で、「母音調和」ではなく「可変母音音素」という用語を導入したことで、かえって記述が繁雑になったのではないか、とか、ロシアや日本の先行研究の一部をもっと参考にすべきではなかったか、といった意見も出された。が、氏の長年にわたるエウェンキ語に関する一連の研究方法が極めて実証的で、十分説得力に富んでいること、しかも氏が本論文で用いた精緻な方法論が極めて独創的であり、今後他の満洲・ツングース諸語の記述研究に導入することが可能であれば、今後の布石となるものとして貢献度も大きいと期待される。本論文がこの方面の研究にとって必読の文献であることは疑いなく、エウェンキ語の記述研究を前進させ新たなる段階に導いた点で高く評価できる。

以上の諸点から、本論文が、博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしいものである点で、審査委員全員の意見が一致した。